

主は生きておられる

鈴木諭香子

一九八九年一月、朝禱会に入れて頂いて喜んでいた。二ヶ月後のことだった。晴天の霹靂の如くそのことは起こった。突然の息子（当時十九歳）の召天である。それからしばらくは「涙は我が糧」であった。

しかし不思議なことが起こった。主からの恵みが雨のごとく毎日私に降り注いだ。悲しみに正比例して注がれる恵み。主は、悲しみの底に降りてきて下さって、慰めを与えて下さる方なのだ。

受洗してからの年数は長かったが、主の臨在を知らなかった。まことに主は生きておられるのだ、と初めてわからせて頂き、そこから私の新しい人生は始まった。

『さあ、我々は主のもとに帰ろう。主は我々を引き裂かれたが、いやし、我々を打たれたが、傷を包んでくださる』（ホセア六・一）

『主を求めよ、そして生きよ』（アモス五・六）